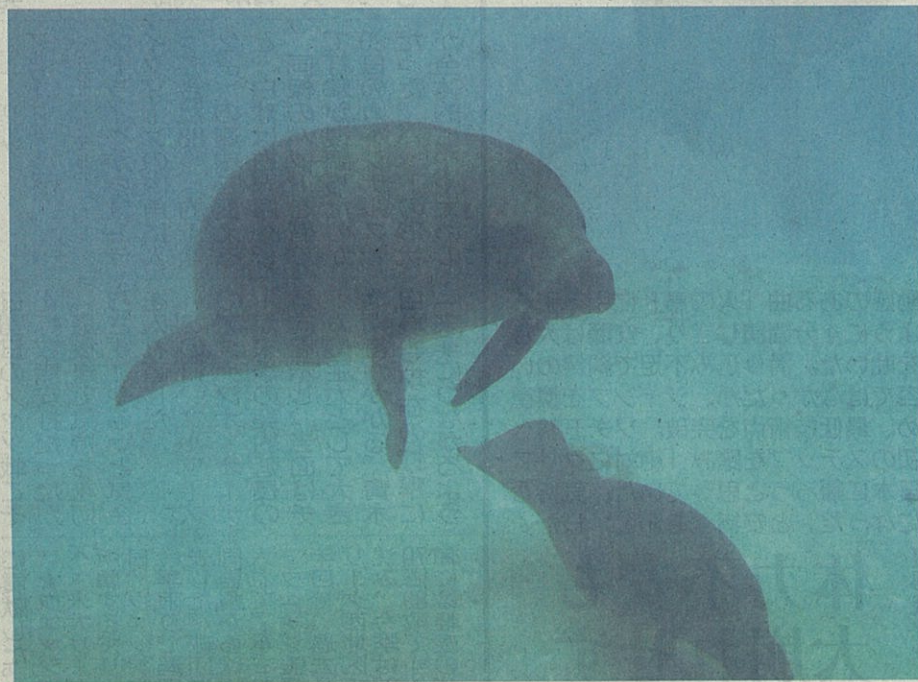


①授乳中の赤ちゃんマナティー。生後2年は時々このようにミルクを与えて育てる②飼育されているアマゾンマナティーの子ども。水を換えたばかりなので、よく見える——いずれもブラジル・マナウスの国立アマゾン研究所で



った。マナティーである。アマゾン川にはアマゾンマナティーというジュゴンに似た動物が生息している。草食性で人を襲ったりしないうえ、おもしろらしく、アマゾン川では現在でも原住民によってモリで仕留められ、食用になることが多いらしい。その時、食べられるのは脂ののった雌の成獣が多い。子連れのお母さんであることも多いらしく、みなしごになった乳飲み子マナティーが毎年10頭以上も見つかるといふ。アマゾン川の水生哺乳類を研究している国立アマゾン研究所のベラ教授は研究所内のプールに子マナティーを保護し、それを一人前、いやマナティー前になるまで育て、自然に戻すことを研究している。



アマゾン川。ピラルクやアロワナ、ピラニアなど、多くの魚がいるが、簡単には見ることはできない——ブラジル・マナウス近郊で、いずれも筆者撮影

亀崎直樹（かめざき・なおき） 1956年生まれ。神戸市立須磨海浜水族園園長。東京大学大学院農学生命科学研究科客員教授、NPO法人日本ウミガメ協議会会長を兼務。専門はウミガメを中心とした海洋生物学。

# 須磨海浜水族園 亀崎園長の あっはれ! 水の動物たち



## マナティーを救え

# アマゾンへ「守る思想」

8月下旬、ブラジルのアマゾンに行ってきた。アマゾン川といえば、ピラニアが牛や馬を襲い、アナコンダがワニを絞め殺す、そんなイメージがあったりする。私はウミガメが専門で、海から離れた内陸のアマゾンには特に用事もなく、行けるとも思ってた。ところが古くからの友人である京都大学野生動物物研究センターの幸島司郎さんから声がかかった。

日本政府が途上国を支援する政府開発援助（ODA）の一つに、SATREPS（サトレップス）地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム）がある。幸島さんが組織したチームとブラジルの国立アマゾン研究所はアマゾンフィールドミュージアム構想というプロジェクトをSATREPSで立ち上げた。

アマゾンには川があり、森があり、多様な生物が存在しているのだが、地元の人々の目に触れることはあまりない。例えば、美しい熱帯魚がたくさんいる。須磨海浜水族園では展示されているので、それを見ることはできるが、アマゾンに住む一般の人たちは見ることがないのである。自然を守る思想を育むにはそれが理解されなければいけない。川で熱帯魚を見て、森に潜む獣に親しむことのできる半自然の施設が必要だ。それを研究成果とリンクさせネットワーキ化し機能させるのがこのプロジェクトの目的である。

ただし、私が研究するウミガメはいない。ところが誘われた理由がある。みは、私もウミガメで経験しているが、簡単にはいかない。モルディブでタイマイというウミガメを子ガメから育てて海に放すというプロジェクトを経験したことがある。ところが、海に放してもうまく定着しない。研究の結果、その海にはタイマイの餌となるカイメンが少ないことが分かった。つまり、タイマイが少ない理由は餌が少ないためで、そこにさらにタイマイを放すと定着しないどころか、今いるタイマイの餌を奪い、飢え

させかねないのである。マナティーとて同じだ。数が少なくなったからといって野放図に放したら、餌となる水草を巡って元からいたマナティーと競争が起こり、かえって数を減らすことにつながるかもしれないのである。アマゾン研究所のマナティー飼育施設を見学したが、水が濁っていてマナティーが見えない。水を換えたばかりの時は泳ぐ姿が見えるのだが、マナティーが出すふんが3日もすれば水が濁ってしまう。見えないマナティーは守りにくい。水を浄化させることは水族館で働く私の専門だということ、アマゾンフィールドミュージアム構想の私の最初の仕事は、子マナティーたちのプールの水を美しくすることになったのである。

次回（10月26日）もアマゾンでの体験を書け。